

あの戦争を語り継ぐ
平和宣言都市
30周年記念連載②

匿名87歳男性（富士地区在住）

航空兵の日々と母との別れ

私は、昭和17年に高等小学校を卒業し、15歳で海軍飛行予科練習生（予科練）を経て入隊し、香取航空隊（現旭市）に配属されました。軍にいたときは正月と海軍記念日以外、毎日「精神注入棒」というカシの棒で、尻をたたかれました。当時はみんなハンモックで寝ていたのですが、尻が痛いので毎日うつ伏せで寝ました。私は死ぬのは平気でした。死んだ方が楽なくらい軍隊生活が苛酷でしたから。で

も、あまりのつらさに自殺したり逃亡したりする人もいました。予科練在籍中に大病で1カ月近く入院し、その間に友人たちは一足早く鹿児島の方へ配属されました。しかし、その友人たちの多くは特別攻撃隊で命を落とし、沖繩にある同隊の慰霊碑には、友人たちの名も刻まれています。終戦後、私は両親と兄弟7人が疎開していた富士に喜んで帰りました。母に会いたくて、心の中で「母ちゃん、母ちゃん」と呼びながら疎開先にたどりの着きました。ところが、玄関に並んで出てきた家族は皆黙って下を向いており、その中に母の姿はありませんでした。「母上は？」と聞くと、兄と姉は黙って仏壇を指差しました。

従軍により精神的には成長しましたが、当時の思い出は今でも話したくない、つらすぎる経験です。

◆予科練 旧海軍の航空兵養成制度の一つで、14歳から17歳の少年を対象に志願制で選抜し、戦争末期は養成後特攻作戦に投入された者も少なくなかった。

◆岸壁の母 戦後、流行歌として人気を博した。

■ 企画政策課男女共同参画室内線 3354